Japan Society of Obstetrics and Gynecology

P3-4-7 CIN3に対する円錐切除術後のフォローアップに関する検討

岐阜大
坊本佳優，牧野　弘，関谷倫子，菊野享子，森重健一郎

【目的】CIN3は子宮頸部高度異形成から上皮内癌までを含めた疾患であり，一般的には診断と治療を兼ねた円錐切除術が行われている．しかし，子宮頸癌治療ガイドラインにおいても術後のフォローアップに関した見解はほとんどない．そこで今回当科でCIN3にて円錐切除術を施行した症例を後方視的に検討したので報告する．【方法】当科で2008年1月から2012年12月までに円錐切除術を施行したCIN3患者209症例の術後の経過についてICを取得のもと後方視的に検討した．【成績】年齢は平均36.0歳（22-71歳），観察期間は平均25か月（0-78か月）であった．手術はハーモニックを用いて円錐切除を施行した症例が77名，LEEPが132名で行われていた．術後病理結果は高度異形成が97例，上皮内癌が108例であった．摘出標本が断端陽性であった症例は88例であった．また，断端評価不明が41例認められ，そのほとんどはLEEPが施行された症例であった．術後に残存が認められた症例が10例おり，そのほかに3年以内の再発を19例（約10%）に認めた．（断端陽性9名，断端陰性4名，断端評価不明4名）また，未受診となった症例が51例と約25%の高い割合で存在した．【結論】CIN3の患者において，円錐切除後に再発が10%の高い割合でみられ，切除断端陰性でも認められることから切除断端の評価にかかわらず，定期的なフォローアップは重要であると考えられる．しかし，未受診となる割合も多いことから術後の再発リスクやフォローアップの重要性を説明することはきわめて重要であると思われた．

P3-4-8 和漢薬ヨクイニンのCINに対するフェノール療法に対する相乗効果と免疫応答

金沢医大
笹川寿之，山口直孝，大阪康宏，坂本人一，藤田智子

【目的】和漢薬ヨクイニン経口投与のCINに対するフェノール療法の効果とその免疫学的因子の解明．【方法】インフォームドコンセントを得た30人のCIN患者に毎日ヨクイニン18錠分3で内服させ，子宮頸部病変にフェノール療法を4週間毎に行った．研究開始時と治癒時にHPV型判定を行い，治療2回ごとに細胞診を行い，2回続けて細胞診正常となった時点で治癒と判定した．過去にフェノール療法のみ行ったCIN患者133例（CIN1；42例，CIN2；62例，CIN3；29例）をコントロールとした．患者の血清と頸管粘液を採取し，Multiplex luminex-beads法でサイトカイン・ケモカイン量を測定した．【成績】コントロール群の治癒までの平均治療回数と期間は，それぞれCIN1；6.2回，5.5か月，CIN2；12.8回，10.0か月，CIN3；18.5回，14.4か月であったが，ヨクイニン投与群では，CIN1；4.8回，4.9か月，CIN2；7.8回，7.7か月，CIN3；6.9回，6.7か月であった．CIN1とCIN2では，ヨクイニン投与群はコントロール群に比べ治療回数は有意に減少したが，治癒までの期間に有意差はみられなかった．一方，CIN3では有意に治療回数は減少し，期間は短縮した（Mann-Whitney's test）．ヨクイニン内服後に子宮頸管粘液中のTh1サイトカイン・ケモカインIFN-γ，IP-10は増加し，炎症性のIL-1β，TNF-αは減少する傾向を示した．前者の傾向を示す患者は早期に治癒し，応答の少ない患者や前者の傾向を示さず後者の傾向のみ示す患者は治療に抵抗する傾向がみられた．【結論】ヨクイニンは，高グレードCINに対するフェノール療法の効果を高める．追加試験が必要であるが，この現象はTh1優位の免疫誘導によると考えられる．

P3-4-9 子宮頸部円錐切除術後の女性のQuality of Life（QOL）に関する検討

横浜市立大
古郡　恵，佐藤美紀子，近藤真哉，鈴木幸雄，最上多恵，ルイズ横田奈朋，松永竜也，宮城悦子，平原史樹

【目的】子宮頸部円錐切除術は低侵襲であり負担の少ない治療として，子宮頸部異形成や子宮頸部上皮内癌に対し行われる．一方，術後に月経や帯下の変化，不正出血を訴える患者を少なからず経験するが，術後のマイナートラブルについての十分な検討はなされていない．円錐切除術が婦人科的QOLに及ぼす影響について検討した．【方法】当院にて円錐切除術を施行し術後フォロー中であった患者（126例）のうち，未受診，閉経後，妊娠中，術後に子宮摘出術を要した症例を除外し，同意の得られた93例を対象とした．月経や帯下の変化を含めた術後の婦人科的QOLについてのアンケート調査を行い，また診療録を基に手術所見との関連性について後方視的検討を加えた．統計学的分析はχ^2検定を使用し，$p<0.05$を有意差ありとした．なお本研究は当院の研究倫理委員会の承認を得て行った．【成績】術後の月経の変化に関しては，9.7%が月経痛が増強し，20.4%が月経量が増え，32.3%が月経期間が長くなったと回答した．また13.8%が帯下が増えたと感じており，26.3%は不正出血を認め，26.1%が術後の変化が生活に支障を与えていると回答した．それらの症状について円錐切除検体の直径，高さを中央値または+1.5SD値を基準として2群に分類し統計解析を行ったところ，切除検体が高く，直径が大きい症例に多い傾向がみられた．特に切除検体の高さが高い症例（≧+1.5SD（2.1cm））では，有意に月経期間が長くなり，QOLも低下した．【結論】子宮頸部円錐切除術後には，月経や帯下の変化，不正出血などにより婦人科的なQOLの低下をきたす可能性があり，特に切除検体が大きい症例に多いことが示唆された．

NII-Electronic Library Service